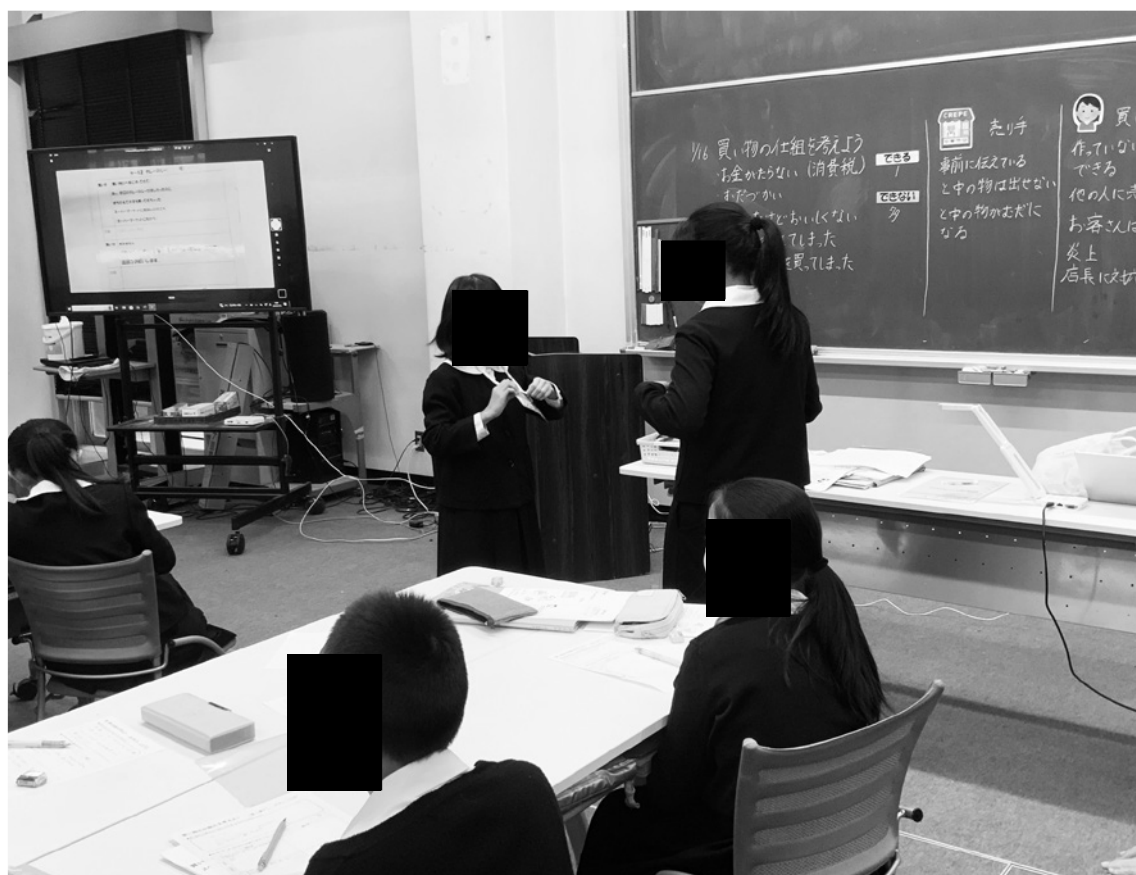


家庭科

自己を見つめ、よりよい生活を創る子



家庭科

自己を見つめ、よりよい生活を創る子

西岡 里奈

日々の生活を学びの対象としている家庭科では、子供たちが創っていくものは「生活」である。変化が大きい現代で、よりよい生活をめざすためには、自己を見つめ多様な価値から取捨選択して生活を創っていく力を身に付けていくことが重要である。自分の生活を当たり前と思うのではなく、自分自身の生活を振り返り他者と関わり、さまざまな視点からとらえていくことで、「自分は、こうしたい!」と思いをもって、生活の主体としてよりよい生活の実現にむけて実践できる子供を育成していく。

1. 家庭科の研究テーマ

(1) 家庭科の課題と子供たちの生活実態

生活をよりよくすることをねらっている家庭科では、子供たちの日々の生活の変化が学習に大きく関わってくる。子供たちを取り巻く環境は日々変化し、家庭の仕事も簡素化や外部化によって内容や質が変わりつつある。変化が激しい現代だからこそ、家庭科で実生活を見つめ、よりよくするための力を身につけていくことが大切である。

本校の子供たちの様子を見てみると、意欲的に学習に取り組む子供が多い。しかし、その一方で、学習に際し自分の生活を意識しているかや、学んだことを生活へと還元できているかという点に至らない部分もある。たとえば、食事の大切さを学習し、「好き嫌いしないで、栄養のバランスよく食事をしたい」と回答していても、実際の食事では嫌いなものを避けたり、偏った食事をとっていたりすることがある。理論としては理解しているかもしれないが、生活をよくしようというところまではたどり着いていない。また、子供たちの生活が多忙化したことで、家庭の仕事に関わる機会や自分で取捨選択をすることが少なくなり、与えられたものを疑問なく受け入れて現状で満足している傾向がある。家庭生活の課題をあげさせても「特にない」と答える子供も多い。そのため、子供たちにとって当たり前と思っている現状をまずは見つめなおすことが重要になってくる。このように変化が激しく、家庭生活へのつながりが希薄化している中で、子供がいかに自分の現状を正確に把握し、問題意識をもって取り組んでいくかが課題である。

(2) 家庭科で求められているものとは

家事の外部化や IoT 家電など子供たちを取り巻く家庭生活が大きく変化し、一から家庭で何かを作るという機会も減少しつつある。世の中が便利になる中で、学校教育の家庭科としてどのようなことが求められているかを見てみると、日本家庭科教育学会(2019)では家庭科教育における重視すべき視点として「生活の科学的認識」「生活に関わる技能・技術の習得」「他者との協力・協働・共生」「未来を見通した設計」の4つをあげている。従来からの生活事象を科学的にとらえ実践していくための知識や技能に加えて、他者との関わりや先を見据えた生活の実現について重要視されている。この点については、平成29年度告示の小学校学習指導要領解説でも改訂の改善事項として、「空間軸」と「時間軸」という二つの視点から家庭科の学習をとらえていくことが示された。空間軸の視点では、家庭、地域、社会という空間的な広がりから、時間軸の視点では、これまでの生活、現在の生活、これからの生活、生涯を見通した生活という時間的な広がりから学習対象を捉えて指導内容を整理することが適当であるとしている。

人との関わりという点においては、「共感性」も注目されている。美馬(2021)は、AI やロボットと共生する社会で人にとって重要なものとして「共感性」をあげており、「生活するとは何なのか」と普段はあまり意識していない、生きることを考えるきっかけを与えてくれる教科としての「家庭科」の意義を説いている。ミルトン・メイヤロフ(1987)は、ケアを「その人が成長すること、自己実現することをたすけること」と定義しており、ネル・ノディングズ(2007)は、いわゆる教科として知識・技能などといった有能さ(competence)にむけてだけでなく、すべての子どもたちをケアすることにむけても教育すべきであるとしている。小学校家庭科でも、異なる世代の人々との関わりなど家族・家庭生活に関する内容の充実が行われ、人との関わりから家庭生活を見つめなおすことの重要性が示されており、本研究でも、

人との関わりの中で子供たちが自分の生活を見つめ直し考えていけるようにしたい。

(2) テーマ設定の理由

①「自己を見つめる」とは

家庭科における学びの対象は家庭生活であり、私たち誰もが営んでいるものである。しかし、それらがあまりにも当たり前の日常であるがゆえに、ほとんどの行為が無意識のうちに行われている。また、子供たちは親や大人の養護のもとに暮らしているため、自分が安心して暮らせる環境におかれていることや、毎日当たり前のように食事が食べられたり、整った衣服を着られるのはなぜかといった家庭生活の本質に気がつくにくく、日々の生活について改めて立ち止まり、暮らしの成り立ちや暮らしを成り立たせるための活動や家族の存在を意識したり、なぜそうするのか理由を考えたりする機会は少ない。また、学校での学習と家庭生活を切り離してとらえている子供もいて、家庭科での学習が家庭実践へとつながっているとは言い難い場面もある。そのため、子供自身が今まで当たり前だと思っていたこと、できていると思っていた生活事象と改めて向き合い、実際にやってみたり考えてみたりする機会をつくるのが、生活に対する見方・考え方を変化させていくことへとつながっていくと考える。そして、改めて家庭生活を意識し向き合うことで、自己を見つめて自分はどのようにしたいかを明確にし、家庭生活にすんで関わっていこうとする態度を育成させたい。

②「よりよい生活を創る」とは

子供によって家庭環境は様々で、自分が当事者であるがゆえに多面的に家庭生活を見ることが難しい。そのため、子供たちの多様な考えや生活様式が現れるような題材を設定し、自分と友達の生活の中に類似性を見付けたり、自分とは違う考えや生活様式を知ったりすることで自分の家庭生活を客観的にふり返られるようにする。そして、家庭生活とは正解があるものではなく、様々な様式や方法・価値があることに気が付き、それを認めて、多様な価値を比較・検討する中でよりよい生活を創るための方法を選択・判断し、決定できる力を身に付けさせていきたい。

2. 全体研究テーマとの関連

(1) 家庭科の本質の吟味

「学びを創る」の定義が「一人一人の子供が、各教科等の本質的な学びを味わい、自らの学びを価値づけること」だとしたら、家庭科における「学びを創る」とは、どのようなことなのか。小学校学習指導要領には、家庭科の学習において「生涯にわたって、自立し共に生きる生活を創造できるよう、よりよい生活を営むために工夫すること」とある。家庭科で子供が創るものは生活であり、よりよい生活を営むためには「どのような生活をおくりたいか」といったその子なりの思いやこだわりが重要である。

そのため、家庭科の本質とは、子供たちが「よりよい生活」を考えるための視点だと考える。平成 29 年の小学校学習指導要領では、生活の営みに係る見方として「協力・協働」「健康・快適・安全」「生活文化の継承・創造」「持続可能な社会の構築」の 4 つが示されている。子供が「こんな生活をおくりたい」と考えたものが、自分自身にとってはよい生活だとしても、他者を思いやっていないものや環境への負荷が多いものなど自分本位で共生と反する内容では、社会生活を構成する一員として難しい。どのような視点で生活を考えていくかが大切である。

そのため、本研究は、学習指導要領に示されている 4 つの視点を家庭科の本質としてとらえて授業を考え、授業実践を通して更なる視点があるかを吟味し、探索的に研究を行っていく。

(2) 一人一人の子供が本質を味わう学びのプロセスのデザイン

家庭科の本質を味わうためには、知識・技能を生活体験等と関連付けてより深く理解するとともに、自立し共に生きる生活を創造できるよう、よりよい生活を営むために工夫することが大切である。そのために、以下の 2 点を意識した授業を展開していく。

① 実生活を意識した題材の工夫

家庭科では、子供たちが生活を見直して学びを創っていくために、衣食住に関する実践的・体験的な活動を通して実生活を意識して学習していくことがとても大切である。今までの研究の成果として、子供たちの実体験にもとづくものを題材として設定をしたところ、自分の生活をふり返って発言したり、実践に向けて改善していこうとしたりする様子が見られた。このように、子供自身が実体験をイメージしやすく、なぜこの題材を学ぶのかをよく理解したうえで学習

していくことが大切である。事前に生活に生かしている場面を設定し、学習後に照らし合わせることで自分自身の成長を実感できるような題材の工夫を行っていく。そのためには、子供たち自身が、家族の一員として成長する自分を肯定的にとらえ、家庭生活の大切さに気付くと共に、「家族にしてもらう自分」から「家族のためにする自分」へと向かっていくことが重要である。ただ、技能や知識を学ぶのではなく、現在の自分が「できること」と「できないこと」を明らかにし、「これからできるようになりたいこと」「なりたい自分の姿」を意識することで、生活を意識して家庭科を学ぶことの必然性が見えてくると考える。そして、子供たちの「このようになりたい」という願いから授業を展開していきたい。例えば、「おみそ汁をつくれるようになりたい」という子供の願いからみそ汁という題材を使って作り方だけでなく、朝食の必要性や栄養、材料を購入するための買い物の仕方や包装やごみなどの環境についてといったように、それぞれを結び付け、生活のしくみや生活事象を関連付けて、一連の流れとしてストーリー性をもって学ばせていく。

②課題解決のための学習活動

子供自身が家庭科の学習を自分事としてとらえ、家庭生活への実践へつなげていくためには、「生活を見つめる→課題を見いだす→課題を解決する→生活に生かす」といった問題解決的な学習を通して、自分自身の生活を見つめて課題を解決していく能力や生活をより良くするために工夫する能力を育んでいくことが重要だと考える。例えば、調理実習を行う際には、作り方を教師が一方的に教えるのではなく、材料の切り方や火加減、ゆでたりいためたりする時間など、子供たちが話し合ったり実際に体験をしたりすることで課題を解決する方法を考えて見つけていけるようにしていく。調理実習では「〇〇を作った」と子供たちは調理したメニューに注目しがちだが、何を作ったではなく、どんな技能や知識を活用して課題解決に取り組んだのかといった学習の過程を意識するように行っていく。このように、問題解決的な学習を充実させ、自分自身で体験し活動を行うことで子供たちが個々の家庭での課題や生活事象と向き合い、よりよい生活を目指すための力を育てていく。

3. 研究の重点

(1)空間軸と時間軸を意識した学び

子供が学びを作るために、空間軸と時間軸を意識した学習を展開していく。時間軸（図1）では、今・ここの自分を考えるだけでなく、過去の自分を振り返って成長を実感するとともに、将来に向けての自分を考えていくことも重要である。家庭科の学習を通して、自分になりたい姿や生活をイメージして学習に取り組むことで、より具体性をもった課題解決へととなると共に、学校生活だけでなく、日々のよりよい生活へとつながっていくと考える。

空間軸（図2）では、学習している内容を授業の時間の中だけで活用してのくのではなく、各教科での学習や学校生活・家庭生活、家庭生活から地域社会や世界と広げていくことが大切である。実践していく中で、自分の身の回りだけでなく、家族の立場になって考えたり、自分の行動が社会にどのような影響を与えているか

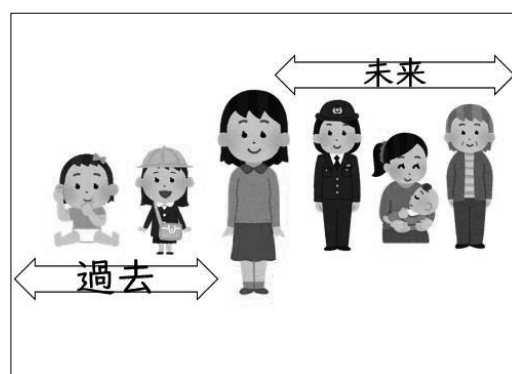
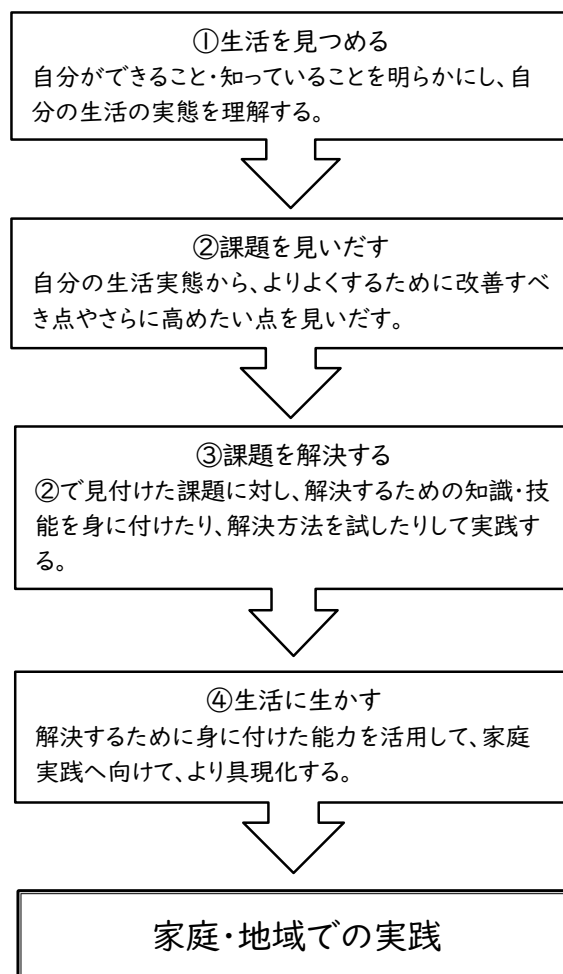


図1 時間軸のイメージ

などを吟味したりと、子供たちが視点を広げていけるようにしたい。

(2) 多様な価値との出会い

子供が自分の学びを創っていくためには、様々な様式や方法・価値があることに気づき、多様な価値を比較・検討する中で客観的に自分を見られるようになることが重要である。そのため、子供たちの思考の幅を広げていく必要がある。例えば、多様な価値があらわれる題材を設定したり共通の経験をしたりすることで、同じ経験でも友達との感じ方の違いがあることに気付いたりといったことがある。

一緒に学ぶ友達の存在も大きな役割を果たす。自分の価値だけにとらわれるのではなく、友達の考えが新たな気づきにつながることもある。共感性をはたかせ、自分だけでなく他者の立場になって考えることも重要である。(図3)そのような学習活動を通して、子供自身がそれぞれの生活例や考えを出し合い話し合い、様々な視点から自分の生活をふり返っていくことで学びを創っていけるようにしたい。

4. 成果と課題

(1) 研究の成果

今年度は、家庭科の本質として、学習指導要領に示されている「協力・協働」「健康・快適・安全」「生活文化の継承・創造」「持続可能な社会の構築」の4つの視点に基づいて授業を行ってきた。この4

つの視点をういて家庭科の内容を考えることができると感じていたが、実際には教員自身が子供たちの考えを意図的にカテゴリー分けしていたことに気づかされた。例えば、消費生活の授業では「持続可能な社会の構築」「健康」「安全」の観点から買い物で食品を選ぶ際の基準を考えていたが、子供たちが自分たちの好みや普段の生活でのなじみ、誰のために選ぶかといった4つの視点以外のことも大切にしていた。このようなことから、子供たちの「思い」も重要であると実感した。教師があらかじめ教科の本質を考えて授業を構成するだけでなく、授業で子供たちが自ら考え、創造し、協力することで生まれる「思い」から家庭科の本質をあらためて見直し、新たな本質を見いだしていくこともできるのではないかと考える。

(2) 今後の課題

家庭科の学習は、「A 家族・家庭生活」「B 衣食住の生活」「C 消費生活・環境」と、多岐にわたり、内容によって重視したい家庭科の本質に違いがある。このように、その領域で求められる教科の本質も変わってくるため、一つ一つの内容ごとに改めて重視したい家庭科の本質を細かく考えていく必要がある。また、成果でも記述した通り、子供たちの意見や考えから家庭科の本質を見直していくことも大切だと考える。子供を主体として、彼らの興味や関心を反映させた授業を展開することで、家庭科の学びをより充実させることができる。今後は、子供たちの思いや対話を重視し、子供たちの実態をさらに反映した授業作りを目指していきたい。

<引用文献>

- ・日本家庭科教育学会 編. (2019). 『未来の生活をつくる 家庭科で育む生活リテラシー』. 明治図書.
- ・文部科学省. (2018). 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 家庭編』. 東洋館出版社.
- ・美馬のゆり. (2021). 『AI の時代を生きる 未来をデザインする創造力と共感力』. 岩波ジュニア新書.
- ・ミルトン・メイヤロフ 田村真・向野宣之訳. (1987). 『ケアの本質 生きることの意味』. ゆみ出版.
- ・ネル・ノディングズ 佐藤学訳. (2007). 『学校におけるケアの挑戦 もう一つの教育を求めて』. ゆみ出版.

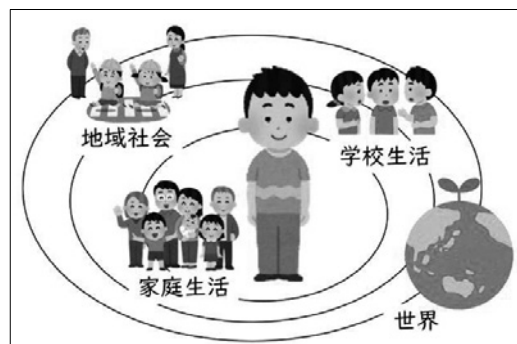


図2 空間軸のイメージ

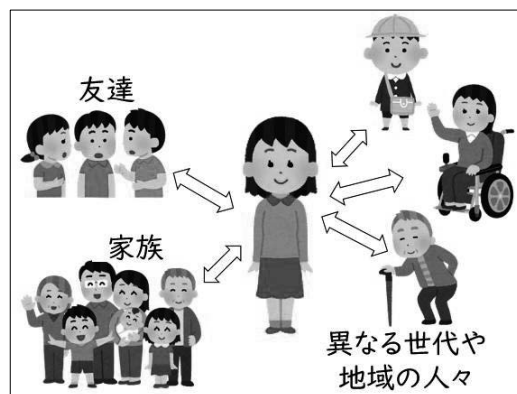


図3 多様な価値との出会い

買い物の新たな視点の探究

ー第5学年「買い物スペシャリストになろう」の実践を通してー

西岡 里奈

1. 課題意識

子供たちにとって買い物は身近なことであり、普段から買い物に行く機会も多い。子供たちの消費行動について事前にアンケートを行った結果、よく買いに行くものとして、お菓子などの食品・文房具・本などがあがっていた。また、支払方法については、現金を使用して買い物をする機会が最も多かったが、交通系 IC カードやバーコード決済など多様化している。現金と違いチャージして使えるプリペイドカードやバーコード決済では、お金を使っている意識が低く、安易に買い物をしている傾向もある。そこで、本題材では、「C 消費生活と環境(1) 物や金銭の使い方と買物」により、品物の選び方や金銭の大切さと金銭の有効な使い方について学習するとともに、買い物の仕組みや消費者の役割について扱って理解を深めていく。

本校では、6年生の宿泊行事で子供自身がメニューを考えて食材を購入し、飯盒炊飯で昼食を作る活動を行っている。店頭では、予算が決まっている中で品物を吟味する子供たちの姿が毎年見られる。しかし、一見、計画的に買い物をしているように見られるが、予算を超えてしまったり、会計後に別の品物を見つけて返品をしたりすることもあり、間違えて購入した品物も簡単に返品できると考え、日々の買い物が売買契約のもとに成り立っているという意識は低い。また、商品に付いている表示などについて確認したり、どのような基準で物を選んでいるかを他者と共有したりする機会も少ない。そこで、本題材では具体的な買い物の場面を想定して買い物の仕組みを考えたり、食材の選び方を学習したりすることで、買い物に関心をもち、品物の選び方と売買契約の基礎にも触れ、自分たちも消費者の一員であるという意識を高めていく。

指導にあたっては、実際に買い物をして子ども達が品物を選ぶ際に悩んだり困ったりすることで、改善しようとする意識につながることを重要だと考えている。そのため、調理実習の材料や子供たちの買い物経験の中であり得る場面を想定し、より具体的に子ども達が品物を買う場面をイメージできるようにしていく。食材の写真や食品表示を使い、実際の買い物場面をイメージしやすくなるように工夫し、価格や量だけでなく、アレルギー表示や添加物、包装などの環境といった多角的に品物を見て判断ができるようにさせたい。

2. 研究テーマとの関連

(1) 家庭科の本質に迫る題材づくり

本題材では、よりよい買い物ができるスペシャリストを目指して授業を展開していく。「よりよい買い物」というと価格に注目する子供が多い。しかし、品物を選ぶときには、様々な要素が関係してくる。そのため、どのような視点で買い物を考えていくかが重要である。提示する品物は様々な視点が現れるものを選択し、子供たちが品物を選ぶときの視点が広がるようにしていく。そして、友達と関わりながら品物を吟味していくことで、家庭科の本質として提案した「協力・協働」「健康・快適・安全」「生活文化の継承・創造」「持続可能な社会の構築」といったものを活用して品物を選択できるようにしていく。また、この4つ以外にも家庭科の本質となりうる要素があるのかも、実際の授業から検討したい。

(2) 一人一人の子供が本質を味わう学びのプロセスのデザイン

実際の家庭生活を考えると材料の購入と調理は一連の流れである。子供たちが実生活を意識して家庭科の本質を味わうために、本題材では買い物の学習を調理実習と関連づけて、調理実習の過程で食材を購入すると仮定した課題を取り入れて、子供たちが必然性をもって学習できるようにする。買い物の仕方を学習する際は、調理実習でチョコバナナケーキを作る場面を想定して、バナナ・チョコレート・ホットケーキミックスを選ぶ授業を行う。実際の食品を手にとって考えることで、子供たちが学びを創っていけるようにしたい。

3. 実践の実際

(1) 題材名

『買い物スペシャリストになろう』

(2) 題材の目標

- ・買い物の仕組みや消費者の役割が分かり、身近な物の選び方や買い方を理解して、購入に必要な情報の収集・整理が適正にできる。(知識及び技能)
- ・身近な物の選び方、買い方について問題を見いだして課題を設定し、様々な解決方法を考え、考えたことを表現するなどして課題を解決する力を身に付ける。(思考力・判断力・表現力等)
- ・生活をよりよくするために、物や金銭の使い方と買い物について課題解決に向けて主体的に取り組んだり、生活を工夫したりして実践しようとしている。(学びに向かう力、人間性等)

(3) 授業の分析・考察

①生活を見つめる

子供たちは日々買い物をしているが、買い物で重視していることや品物を選択するときの視点は様々である。そのため、よりよい買い物ができる買い物スペシャリストになるために、まずは、題材のゴールである「よいよい買い物」とは、具体的にどのようなものなのかを考えた。「生活がしやすくなったり使う時が楽しみになる物」や「自分がこれからずっと使える物を買った時」「自分がひつような物を買えたこと」「人に買ったものをあげて、よろこんでもらえた」と題材の本質にせまるような考えがあがった一方で、「割引されている物や他の店の商品とくらべて、ちょっとでも安い所を見つけたり、買いたい物がお得な日に行くこと」「夕方におそうぎのすきなのを半額シールつきで買えた時」といった値段に関するものも多く上がった。「よいよい買い物」として、多くの子供が値段やお得感といったものを重視して買い物をしている実態があった。

学習する前

よりよい買い物とは

・家にないものを計画的に買う
・おとななものを買う(セール品など)
・ゆだんや必要なものを考えてから
・買い物する
・安い物をたくさん買えた



②課題を見いだす

次に、よりよい買い物ができるようになるために、学習したいこと考えた。「物の相場が知りたい」「コストパの良い物の見分け方が知りたい」「よい品物の見分け方を知りたい」「買い物の仕方やしくみを知りたい」「家のお金について知りたい」「お金を稼いで、お金を稼ぐ大変さを知れば、お金を大切に使えるようになるのでは」といった意見があがった。これらの子供たちの疑問を解決できるように授業を展開していった。

まずは、家庭の中のお金について、家庭の支出と収入にはどのようなものがあるかを考えた。自分たちの身の回りでお金を払って購入しているものはたくさんある一方で、家の中に入ってくるお金は限られていることを知って、「ただ、自分のほしい物だけを買うのではなく、支出と収入の割合を考えることによって借金などをせずにすむ。」「収入と支出のバランスをよくするために好きな物や必要とする物の区別をしたら、支出が増えなくなるから、買い物のスペシャリストになると思いました。予算をきめるとき基準があった方が良くと思いました。」などと理解を深めることができた。

③課題を解決する

お金の大切さや収支のバランスの重要性について理解したところで、子供たちが疑問からもあがっていた「買い物

	今日のポイント・キーワード	買い物スペシャリストになるために考えたこと・大切なこと
① 1月 9日	消費と収入の バランス	ふだん日常生活に使っているものも ほぼすべて消費するこじであるのだと あらためて知りました。 収入したものを全て使ってしまうと、 ゆりをもてないのていつも消費と収入 のバランスを考えて消費したいと思います。

の仕方」と「品物の選び方」について考える授業を行った。

まず、「買い物の仕方」については、自分たちの買い物での失敗経験を共有することから始めた。「買い物をしたら、他の店のほうが安かった」「家にあるものを買ってしまった」などといった経験があがり、その対処法として「店に返品をすればいい」「中古店に売ればよい」と品物を選んで買い物をすることを安易に考えている子供もいた。そこで、ロールプレイングから売買契約について考え、日々の買い物は契約によって成り立っているの、一方的に取り消しはできないことを学習した。ロールプレイングでは、買い手と売り手のそれぞれの立場で考えたことで、今までは消費者として買い手の立場だけで買い物を考えていた子供たちも、「なんでも返品しているとお店も困ってしまう」「誰かが一度買ったものは、返品されても危ない物が入れられてしまっているかもしれないから、売れないんじゃないかな」「間違ったものを買ってしまったのは買い手のミスだから、お店は悪くないと思う」と、双方の立場から買い物の仕方を考えられるようになった。

次に、「品物の選び方」については、子供たちが家庭でも実践できるように、チョコバナナケーキの作り方を示して、その材料を選択する授業を行った。

まず初めに、AとBのバナナを示して買いたい方を選択し、なぜ、それにしたのか選んだ理由を共有した。値段や産地、見た目、有機JASマークなどが選んだ理由としてあがった。Bのバナナは見切り品のため、色が少し黒ずんでいたが、それをシュガースポットと勘違いしてBのほうが甘いと考える子供もいた。

次に、チョコレートとホットケーキミックスについて考えた。事前に「よりよい買い物」を考えた際は、値段が安いものがよいと考える子供たちが多かったが、一番安いプライベートブランドのCのチョコレートとホットケーキミックスを選んだ子供は少なかった。Cを選ばなかった子供の意見としては、「いつも買っている物のほうが値段は高くても味がわかっているから安心する。」といったものが多かった。選んだ視点としては、原材料、添加物、使う

量、味、食品ロス、賞味期限、アレルギー表示などがあがった。

学習後の振り返りでは、「値段だけで決めるのではなく、生産地や賞味期限、安全性を考えて買った方がいいと思った。買うときに作るときのこと考えながら買う



② 月 日	義務	今まで、商品を買う時に契約
	権利	をしていたなんて知らなかった
	契約	から、しっかりと確認をして買う、
		取り消しはできないな と思いました。

炊飯器でチョコバナナケーキを作ってみよう

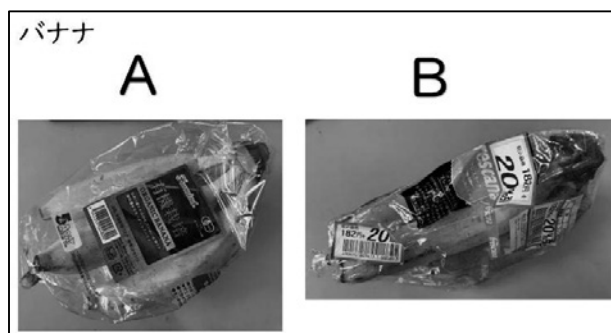
<材料>

- バナナ ……1本
- チョコレート ……1まい(50g)
- ホットケーキミックス ……150g
- 牛乳 ……100mL
- 卵 ……1こ※

※卵を入れないときは、牛乳を150mLにする。

<作り方>

- バナナを輪切りにする。
- チョコレートを小さく切る。
- ボウルに牛乳と卵を入れて、よく混ぜる。
- 次にホットケーキミックスを入れて、かるく混ぜる。
- 生地を炊飯器に入れてから、バナナとチョコを入れる。
- 炊飯ボタンを押す。
- 炊きあがったら、竹串をさして、生地がついてこなければ完成。



	A	B	C
バナナ	200円 5本 有機栽培 有機JASマーク レインフォレストアライアンス認証	182円の20% 4本 見切り品 少し鮮度が悪い	
チョコレート	200円 50g フェアトレード認証 カカオ70%	120円 50g プライベートブランド アレルギーが多い	150円 50g 大手メーカー 包装に再生紙を使用
ホットケーキミックス	300円 150g×2袋 大手メーカー 卵不使用	400円 150g×2袋 大手メーカー 北海道小麦使用	250円 600g プライベートブランド

と、よりよい買い物ができると思った。」「質がいいものだったり作られた場所が国産のものなど、信頼できるものを必要な分だけ買いたい。」と、品物を選ぶときの視点に広がりが見られた。

「よい品物の見分け方を知りたい」という最初の子供たちの要望に対しては、「アレルギーがあったらそれを最優先にしないではいけなし、予算にもよるから、何を優先するかは場面によってかわってくる」と、すべての条件をクリアする品物が常にあるわけではなく、場面によって判断していくことが重要であることを理解することができた。

実際の授業では、炊飯器で作ったケーキも試食して、選択した食品と実際の料理を関連付けて考えられるように工夫をおこなった。

④生活に生かす

授業後には、「家で自分で作ってみました。」「チョコレートをチョコチップにして作ってみた。」「本当に、スーパーマーケットには、たくさんの種類のホットケーキミックスが売っていたよ。」と、実践する子供たちの姿も見られた。ロールプレイングや実物を使って実生活を意識して授業を行ったことで、生活場面へとつながりやすくなったのではないかと考える。

題材のまとめでは、「学習前では、あまり量、質など考えて買ったことがなかったから、値段以外にもいろんなことが書かれているから買い物のときは見るようにする。」「ただ、買いたい物を買うのが買い物だと思っていたけど、授業を通して環境のことを考えたりしないといけないことを知った。」と記述し、本題材を通して買い物への理解を深めて消費者としての意識を高めることができた。

4. まとめ

(1) 研究の成果

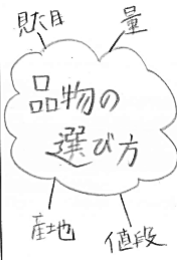
実生活を意識している教科だからこそ、やはり状況設定が大事だと感じた。今回の買い物は状況が変われば品物を選ぶときの視点も変わってくるので、品物で違いを出すだけでなく、状況設定を変えることでも、子供たちの視点の広がりをうながすことができることに気づかされた。

また、今までの授業では学習指導要領の4つの視点に落とし込んで考えていたが、子供たちが見出した情報を整理することでも家庭科の本質を考えることができ、具体的な学びをカテゴリー化することで家庭科の本質を作り出していけるのではないかと実感した。

(2) 今後の課題

多様な視点に気づけるように選択する食品に要素を多く入れたが、情報量が多すぎて散漫とした結果にもなってしまった。そのため、この時間に重視したい教科の本質をしばって、それに合った教材を選択していくことが重要だと感じた。

他者の視点にたてるように友達と調理をおこなう調理実習という設定にしたが、子供たちは自分の思いが強く、対話が生まれづらかった点が課題としてあった。もっと具体的な場面を想定することで、自分の立場だけでなく社会に目を向けて環境を考えたり、他者の立場に立って品物を選択したりできるようになるのではないかと考える。今後は、自分だけでなく、人との関わりからも考えていけるようにしたい。

③ 1月16日	賞味期限 フェアトレード	自分に必要なものを選ぶときに 賞味期限や産地を見るだけで なく、「フェアトレード」などのマーク も見ると、その商品はどういうこと があったのかも知れるのいいなと 思いました
③ 1月16日		・品物を選ぶには、見た目や 値段だけでなく量や安全な ものかなど確認しなくては いけない!! ・環境も!!